

藤田浩子の 少し昔のこと 〈70〉

昔話の中の「魔除け」

私が語る「鬼は内」という話には鬼を退治するおまじないがたくさん出てきます。また「食わず女房」にも魔除けの草が出てきます。

炒り豆 この豆が芽を出すまで来るなよというおまじないです。炒った豆から芽が出る筈ありません。

鰯の頭 その悪臭で鬼（魔物）を退散させるとか、この鰯が泳ぎ出すまで来るなよと鬼を寄せ付けない。

柗の葉 門口に柗をぶらさげておくと、そのとがった葉で鬼の目を突くので鬼が寄りつかない。

目籠 穴（目）がたくさんある籠（または笊）のことで、鬼の世界では、一つ目より二つ目、二つ目より三つ目、目が多い方が強いとされている、目籠には大きな目がたくさんあるので鬼が恐れて逃げていく。



菖蒲の葉 亭主をさらって山に戻る山姥が、亭主に逃げられ、とがった葉で目を突つき、目をつぶしたので、魔除けとして蓬といっしょに屋根に上げておく。

蓬 その臭い匂いで山姥が亭主を捜すのをあきらめたので、魔除けにする。

悪いことはすべて鬼（山姥も含めて）の仕業と思っていた時代、流行病（はやりやまい）も鬼の仕業だからと、魔除けのおまじないをいろいろかんがえたのでしょう。疱瘡を流行らせる疫病神は赤い物が嫌いだからと、赤い布を入り口にぶら下げたり、病人に赤い鉢巻きをさせたそうです。村境に大きな藁人形を立てて、疫病神の侵入を防ごうとした所もあります。

今回は、西の方の海に住むという「アマビエ」が「疫病が流行ったら私の姿を写して人々に見せなさい」と言ったとかで、アマビエの絵が一躍人気者になりました。人の心は弱いのでしょうか、いつの時代でも何かに頼って、少しだけでも安心したいのでしょうかね。

リレー連載 <203>

わたしの大好きな絵本

しーちゃん（おはなしおはなしグーチョコキパー）

『ちいさなちいさなおばあちゃん』

作：エルサ・ベスコフ

訳：いしいとしこ 偕成社

昨年、孫が生まれ、自分がおばあちゃんになってタイトルに“おばあちゃん”がついているこの本を手にとって読みました。

スウェーデンの絵本作家、エルサ・ベスコフのデビュー作で100年以上も子どもたちに愛されてきた古典的な作品です。

私が気に入っているのは、その絵！！細かく可愛らしく自然となごむ、どこか私が昔一生懸命描いていた絵に近いものがあり、ほっと穏やかにさせてくれます。

そして繰り返しのおはなしは頭の中に情景が浮かび、想像力でおはなしの世界に自然と入っていきます。

勝手にミルクを飲んでしまったネコを叱ったおばあちゃんが、家出してしまったネコに帰ってきて欲しいと願っている気持ち、ネコもタイミングを待っている様子が絵からも伝わり、微笑ましく、ページ最後のエルサのコメントに作者の優しさが感じられ、何ともあたたかい気持ちになります。孫が大きくなったら、一緒に読みたいと思います。

